



専攻長あいさつ

教職実践高度化専攻 専攻長 佐々木 司

山口大学教職大学院は今年で開設から「9年目」を迎えました。来年が10年節目の年となります。この先10年、20年とさらに力強く歩いていくためにも、現役の大学院生、教員はもちろん、修了生やかつて在籍していた教員、学校・教育委員会関係者が参加できる、何か大きなイベントを来年度中に行ってはどうかと考えています。開設から9年経った今、気持ちに少し余裕をもった教職大学院が、将来を見据えながら「これまで」を振り返る、今年をそんな年にしたいというのが私の思いです。

ところで「9年目」の「9」といえば、英語に“think outside the nine dots”という表現があります。9つの点で作られる領域のなかで考えるのではなく、固定観念を捨てた斬新なモノの見方、考え方をせよといった意味で、“think out of the box”などとも言われます。9点の結び方は「そんなのアリ?」とつまみこみたくなるものなのですが、いわゆる「コロンブスの卵」とは、案外そのようなものかもしれません。ちなみに、ニワトリの生卵はコロンブスのようにしなくとも、そのまま机上に立てることができます。もしかしたら、これこそが多くの人にとって「コロンブスの卵」になるのかもしれません。

教職大学院9年目に9点をつなぐ。その際、9点の外に出るもよし、出ずにつなぐ方法を探るもよし。10年目は、けっして10年目だけで10年目になるわけではありません。9年目に在籍している大学院生の発想や企画力に大いに期待しています。

教職大学院での学び(講義紹介)

【「生徒指導の実践と課題」について】

生徒指導と聞くと、行動判断を間違えたり、友達を故意に傷つけてしまったりした児童生徒を、先生が一方向的に叱責している場面をイメージする人が多いでしょう。生徒指導とは、児童生徒が自発的・主体的に成長・発達する過程を支える教育活動のことを指します。この講義では、実際に起こった生徒指導の事案をもとに、どのように対応したらよいのか院生同士で解決策を話し合う活動が設定されており、「生徒指導」の在り方や具体的な指導方法について理論と実践を往還しながら学んでいます。実際の教育現場で学びをしっかりと生かせるよう、様々な視点から児童生徒への関わり方や支援の仕方を見つめる時間を大切にしていきます。(教育開発実践コース1年生)



【「教科カリキュラム開発・授業デザインと評価」について】

この講義では、「教材研究とは」「発問とは」などの様々な視点から、「授業をつくるとはどういうことなのか」をテーマに、授業づくりの理論を学んでいます。現職教員としてこれまで重ねてきた授業実践を講義の内容と結び付けながら振り返ることで、授業をつくる上で大切なことがより明確になり、これを原籍校での助言に生かすことができています。教科カリキュラムの改善・修正につながる授業設計や授業評価についての視野を広げ、さらに実践研究を通して学校全体に広めることで、教員の授業力向上や子どもの学力向上につなげていきたいと考えています。(学校経営コース1年生)

【「特別支援教育開発演習」について】

この講義では、通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった多様な学びの場における教育実践について、院生が論文を持ち寄り、協議をしながら幅広く考察しています。その際、「学校、家庭、地域」や「教育、心理、福祉、医療」といった多角的な視点から実践論文を読み解き、ストレートマスターと現職教員が話し合うことで、特別なニーズを有する子どもへの支援の在り方と今後の特別支援教育の展望について、見つめなおす時間になっています。少人数ということもあり、こぢんまりとした雰囲気の中で授業が行われています。(特別支援教育コース2年生)

コース合同研究会について

コース合同研究会は、コースの垣根を越えた関わりをとおし、人間関係を深めるとともに、互いの専門性から深い学びを吸収する研修の場です。新年度をスタートするにあたり、院生のプロジェクトチームが企画・運営した取組を紹介します。

【① オリエンテーション】4月に、新入生対象のオリエンテーションを3日間行いました。オリエンテーションは大学教員主体部分と院生企画部分によって構成され、全体運営は院生が行いました。今回の企画で意識したことなどを学校経営コース2年の谷貞佑院生にインタビューしました。



問い:オリエンテーション全体の企画・運営を行う際に、何を意識しましたか。

谷:企画にあたり、「『大学院オリエンテーション』にふさわしい各プログラムの軸設定とは?」という問いを院生全体で共有し、「驚き」「発見」「納得」など、自己の変容を語るができる企画を目指しました。とりわけ、大学院で学ぶこととのつながりが、後々「ああ、なるほど」「あの学びはこれにつながっていたのか」という学びの自覚を提供しようと熟考しました。大学教員と教職大学院3コース院生が、より深い学びを進めるためには人間関係の構築ができるような企画も意識しました。

問い:オリエンテーションの企画・運営を通して、どのような学びがありましたか。

谷:「個人の強みを組織の中で生かす」ことを実践的に学びました。オリエンテーションで充実した学びを提供するために、各プログラムの計画では、担当院生の長所が発揮できる内容や手法を取り入れました。企画を担当するチームで協議を重ね、人間関係を深め、心理的安全性のある組織的な動きになりました。これにより、担当チームがアイデアを生かしながらチームで責任をもって実施し、構成力を磨くことにつながったと感じています。結果として、スクールリーダーとしてのマネジメント力を高める機会となりました。

【② 3コース合同ディスカッション】オリエンテーションと合わせて、3コース合同ディスカッションを行いました。参加者から、当日の様子や参加してみたの感想をレポートします。

今回のオリエンテーションで、入学する前の不安を随分と解消することができました。カリキュラム全体のことや授業内容はもちろん、どのような人たちが在籍しているのか、実際の顔と顔を合わせて知れたことで、大きな安心に繋がりました。そして今後、この大学院で学びを深めていきたいという決意を新たにできました。(学校経営コース 1年生)

3コース合同ディスカッションでは、「教師に求められているもの」をテーマに話し合いました。グループでの意見の共有や、話し合いやすい雰囲気づくり、意見のまとめ方など、様々なディスカッションの工夫について学ぶことができました。また、曖昧なテーマを具体的に戻して話し合うことで、教員として何を大切にしているか、院生同士が深く知り合う機会になりました。また、意見が言いやすい雰囲気を作ったり、グループの人の考えを取り入れながらまとめたり、それらをもとに表現物を作ったりもしました。現職の先生方のサポートもありながらですが、講義以外の場でもこのような経験ができることは、今後教員となる自分の貴重な財産になりました。(教育実践開発コース 2年生)

現職院生、ストレートマスターで「教師に求められているもの」をテーマに話し合いをしました。現職院生は校種やこれまでの教員経験をもとに、ストレートマスターは実習での経験やこれまで学んだ知識をもとに意見を出し合いました。出された意見には、現在と未来の多様な教師像や教育の在り方が表されていて、どれもが必要なものだと感じました。各々の思いや考えを尊重しながら、切磋琢磨できる環境で学んでいけることを嬉しく思います。(特別支援教育コース 1年生)